

矢吹俊男委員 講話「モノ・ヒト・バ ― 自然と文化のタカラモノ」

○ もしもを想像することで未来を変える

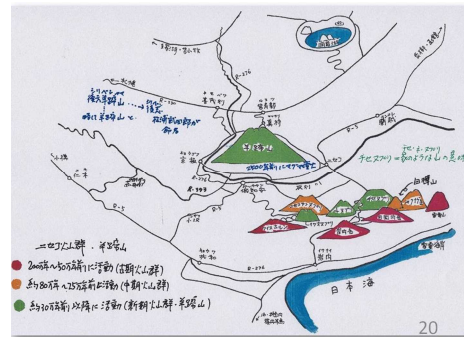
- ・ 歴史には「もしも」という言葉がない。高校のとき、真面目に勉強していたら…と思ったことがあると思うが、今ある姿というのは、過去からの延長である。だから、過去のことを認識して評価をする。批判ではなく、自分の生き方や人の生き方、もののあり方を自分なりに評価しないと進まないし、評価することで、次の発展につながるものである。
- ・ 「あのときこうだった」という過去を振り返って、改善し続けることが大切である。
- ・ 教育というのは、過去からの伝承である。それを子どもたちに教えていなければならない。学校教育は、ある程度の姿が決まっており、「与えられる」教育であるが、一方で社会教育は、形がない。「学ばなくて良い」という考えの人はいるが、学ぶための材料はたくさんある。それに気づく仕掛けをつくらなくては、人々は当たり前の姿に慣れてしまう。

○ 後志は海、山、田園地帯が凝縮された地域

- ・ 後志は海、山、田園地帯が存在し、さまざまな地域特性が凝縮した地域である。
- ・ 例えば空知は、平坦な土地で、車でスピードを出して走るとバウンドを感じるくらい地下はほとんどが泥炭であることが特徴である。
- ・ 後志には支笏洞爺国立公園がある。国立公園は昨年 70 周年を迎えたが、それらは全て火山活動から成っている。

○ 風景は自然が織りなす芸術作品

- ・ 図は正確ではないということを前提に話すこととする。
- ・ もしも、11座のニセコの連なった山がなかったら、どういう眺めになっているかということを想像してほしい。
- ・ 昨年、地元の小学校4年生と同じテーマで話した際、ある子は「うちの家族は仕事にならないので、ここにはいない」と言っていた。スキー場の関係の仕事をやっているようだった。もしもこの山々がなかったら、雪も降らないし、眺めは良いかと思う。少し高いところに登ると日本海が見える。
- ・ そういうところを想像してみると、景観は色々な自然の要件によって成り立っていることが分かる。
- ・ 羊蹄山の周り、蘭越を含めた7つの町村は、明治の開拓から現在までその軌跡は似ており、平らな土地や水辺の周りを開墾して広大な畑をつくった歴史がある。また文化も似ている。
- ・ 人々が日々目にしている景観は、松浦武四郎が入ってきてからの150年、その前の江戸時代、アイヌの人が生活していたころから変わっていないはずである。ただ、かつての景観の上に、建物が建って、道路ができて、鉄道ができて、その周辺に集落ができ、市街地が形成されていった。その当時のことを目にした、現在100歳になる方たちは、私たちに色々なことを伝えてくださっている。
- ・ だいぶ前にお亡くなりになった、植物学者の桑原義晴先生は、自ら書いた植物図鑑の挨拶文にこのような文章を書いている。「私たちが見ている風景というのは、自然が織りな



す最高の芸術作品である。」その芸術作品の中身というのは、ものすごく奥が深い、ということ伝えるために、桑原先生は年に十数回、羊蹄山に登ったり、ニセコの山々に登ったりしていたようである。すべての山の植物から成る景観を調べられた。

- ・ このまちで生まれ、後世に知識を伝えてきた桑原先生のような方たちの言葉というのは重みがある。その重みは、私たちが日々見ている景観、環境にプラスされると、さらに奥が深くなるような気がしている。

○ モノ・ヒト・バの関係性

- ・ モノ・ヒト・バというのは、博物館や美術館に勤務していたころからの専門用語のようなものであるが、モノは博物館に展示するモノ、ヒトは訪れるお客さん、バというのは地域を含めた大きな空間という意味である。バはモノとヒトをつなぐ場所とも言える。

- ・ 「地域というバで、地域にいるヒトとモノを通して」とあるが、この通りだと思う。

- ・ もしも、200 万年前に雷電山が噴火してできなかったら、ニセコの山々はできていない。

- ・ 火山活動史を研究している方々によると、西から東に向かって山が形成されていったという20年以上も研究して出しているデータがある。

- ・ 考古学は、火山と密接に関係する学問である。地面を掘ることは、火山灰を掘っているということである。

- ・ 火山灰も履歴を把握していないと、年代やどこから飛んできたものか、分からなくなる。火山活動というのは、土地の履歴、成り立ちに大きく関わることである。

- ・ ねずみの歴史、サルの歴史という言葉はなく、それらは進化と言われる。歴史というのは、人間の生活に関わるという意味だと思っている。

- ・ 地域のモノというのは、地域の成り立ちを知るための情報・資料、地域の光、誇りとなる。それらを利用する人がいて、利用する人がさらにその自然を見出してきて、元の形から姿を変え、色々なヒトに提供するという循環がある。

- ・ ヒトがいて、自然・資源があり、利用という言葉があるとすると、それらは矢印で循環している。

- ・ 自然資源を手にした人間は、例えば一握りの石を割ってみると尖った部品が出てきた。これは使えるということで、道具が始まる。また、食べるもの、見るものも同じように、循環している。

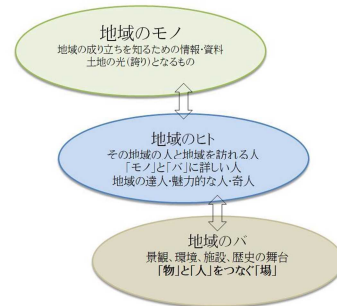
- ・ 地域のヒトは、地域のヒトと地域を訪れるヒト、モノとバに詳しいヒト、奇人、達人も含まれる。

- ・ 景観、環境、施設、歴史の舞台としてのバはモノとヒトをつなぐ。

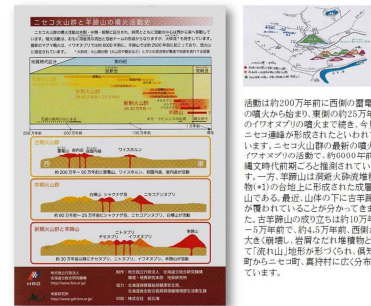
○ 天災から学ぶ

- ・ 昨年の12月前より、北海道の考古学研究者が集まり、「天災のいまに立ち向かう」というタイトルで一冊の本を出そうということになった。

- ・ 水害、地震、津波、火山活動などから、今を考え、次にどうつないでいくかということ、



2



4

遺跡の発掘事例から警鐘を鳴らすのではなく、「こういうことがあったから、気を付けてください」という言い方でまとめよう、ということになっている。

- その中で、私も羊蹄山麓の部分執筆したが、ここは自然災害が少ないところである。羊蹄山の土砂崩れや岩石崩れなどの土砂災害や川の氾濫、雪害は頻繁にあるものの、それ以外の災害はない。
- 雪害は、ニセコの山があり、日本海が形成され、そこを超える冷たく冷やされた大気が雪となって山麓地域に降らせるというメカニズムになっているため、日本海と山がある限りは変わらないことである。

○ 地域の人々の暮らしからタカラモノが生み出される

- 昭和34年当時、倶知安高校で教師をしていた武井時紀さんという方が生徒のために歴史の授業の資料として書いた図である。2万年前の倶知安の様子で、この頃からヒトが住み始めたという歴史のはじまりである。そして、山、川があり、少し走れば海があるとところに私たちは住んでいる、自然のタカラモノに囲まれている。そのタカラモノの中に人が生活していて、そこに文化(タカラモノ)が生み出される。
- それぞれのタカラモノというのが、その各土地で存在していく。



5

自然のタカラモノ



6

文化のタカラモノ



11

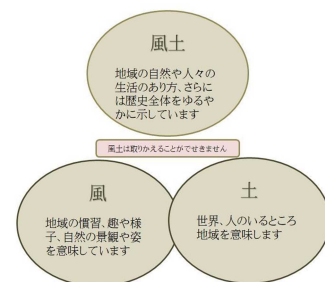
文化のタカラモノ



12

○ 風土とは

- 倶知安風土館を立ち上げるときに、一つのエリアとしての目標を掲げた。羊蹄山麓、尻別川流域、堀株川に挟まれたニセコエリアを対象にした。広範囲を対象としたが、その何分の一も関わることができず私は退いた。
- 風土というのは、風、土という言葉に分けることができる。和辻哲郎さんの「風土」という本が古典となっているが、今日はそこには触れません。
- 風土の「風」というのは、「地域の慣習、趣や様子、自然の景観や姿」を意味する。慣習というのは「なりわい」であり、子どもが生まれて行事があり、親に慈しまれて育っていく、その過程も慣習に含まれる。
- 風土の「土」というのは、「世界、ヒトのいるところ、地域」という意味である。
- これらが「風土」を形作る。「地域の自然や人々の生活のあり方、さらには歴史全体をゆるやかに示している」。風土というのは、取り換えることができない。



9

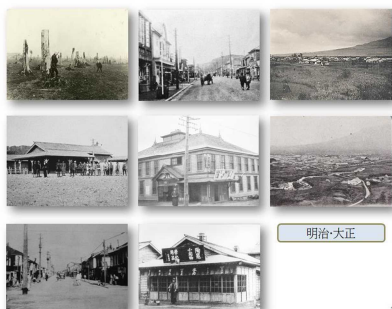
○ 倶知安町の市街地の形成

- モノクロ写真は昭和23年、米軍がこの地域を空撮した写真である。右側のカラー写真は、平成13年、倶知安町が空撮した写真で、風土館の床にも貼ってある写真。
- 国道276号線を基準に並べたが、この行きつくところは旭ヶ丘公園。国道5号と基線通り(現メルヘン通り・国道276号)の交差点あたりを「九号線市街地」と呼んでいた時代がある。
- 市街地が偏ってはいけいない、分散すべきだということで、そこから南の方へ市街地を移した。羊蹄丸という回転寿司屋から、日産のあたり、ニセコひらふ地区にいく道路(道道蘭越ニセコ倶知安線)の交差点のあたりまで、移っていった。
- 地形を調べないで移設しようとしたところ、雨が降って川が溢れたら、その公設市街地は、常に水に浸った状態になってしまう。
- 当時の取り決めをもって、無作為に移すということは、そういうことになるという一つの例である。そのときから、旧公設市街地で商売をやっている方もいる。
- その後、明治37年に九号線市街地から停車場通り(現在の駅前通り)に移る。函館線が開通してから、駅前には、1、2年で店や旅館の数が倍ずつ増えていった。停車場周辺や5号線から基線通りにかけての一大繁華街、市街地を形成する。
- その前は、ここから東へ向かったところの六郷市街地。色々な方が調べたデータを見ると、六郷にも、旅館が数件、劇場、また飲食店が相当あった時代があった。
- その前は八幡というところにあり、現在の倶知安神社のあたりに若干の市街地があった。そこから西に向かって市街地が形成されていく。
- 大正8年には、胆振線の京極-倶知安間が開通したときに、六郷はますます栄えていく。羊蹄山麓の南側と東側から農産物が集約され、倶知安駅に持ってこられた。そうすると、留寿都や喜茂別、京極から来た人は、六郷で一泊しなければならないため、そこに泊まる場所、食事をするところが必要となった。
- 胆振線が喜茂別まで延伸した昭和初期には、六郷がさびれてくる。六郷には人は宿泊しなくなった。
- 人びとは鉄道で行き来し、そのうち道路が整備され、鉄道によってもともとあった市街地が集約される。しかし、周辺の見える範囲の景観は、高い建物が建つわけでもなく、あまり変わらない。



16

○ 昔から楽しまれていた倶知安の風景



13



14



15

- このような風景が日々みなさんの目に触れていた。建物があつたとしても、洋風建築があつたとしても、周辺にはこのような風景が展開されていた。レルヒがスキーを持って羊蹄山に登った年もそうである。
- 昭和 17~20 年までニセコ山頂で、風洞実験、着氷実験を行ったときも、ニセコの山を選んだのは、吹雪になったら実験に最適だという評価があつたからである。現在は、ニセコアンヌプリ山頂のコンクリートの台座しか残っていない。
- 昭和 38 年には、第1期のヒラフスキー場がオープンし、長蛇の列ができた。それが時代の流れによって、スキー場が増えていっている。かつては、建物は一か所にかたまらず、周辺に散らばっているスカスカの状態であった。
- スキー場で夜間照明が行われるようになってからは、倶知安の夜のあり方が変わってきている。夜景の光のページェントを人々は楽しむ。
- 景色を楽しんだということが松浦武四郎である。この方は、倶知安町にも来ており、安政 5 年から 6 年にかけて、尻別川を下り、途中何泊もしながらソウスケ（現在の字高砂）の方まで来る。その出発点で、やはり羊蹄山を見て登った風に日記を書いた。だから、倶知安の歴史には、松浦武四郎、羊蹄山に登ると記載があるが、史実ではない。しかし、武四郎に登りたいと思った山がそこにあったということである。
- 洞爺湖の高台に登ったら、そこから見える景色というのは、今でもあまり変わらないはずである。尻別岳、羊蹄山、ニセコアンヌプリ、西の方には昆布岳が見える。そういうところに、私たちは生活をしている。

[illegible]

18

○ 当たり前に見える風景の大切さ

- ・ 今までの生活の中でマスクをしている姿は当たり前ではなかった。今となつては、当たり前前のことがいかに有難かったかということを感じるが、確かに当たり前前のことが周辺にはあった。
- ・ 突然、外に横切るように新幹線の高架ができたとき、その時代の人たちにとっては「なぜあそこに出来たのか」と疑問を持つこともあるかもしれない。時間が経てば、そういう風景だと思ふようになってしまうかもしれないが、今だからこそ感じる違和感をよりどころに馴染む色を考えてほしいと思う。
- ・ 東北新幹線ができたとき、福島市内の平野にあの高架が突っ走ることになった。今まで自分が子どもの頃から見ていた風景とは全く違う景色であったが、新幹線がすごい音を立てて通っていくのを見たときには、「時代が進んだ」という気持ちにはならなかった気がする。

○ 矢吹委員と倶知安との出会い

- 私は倶知安にお世話になってから32年がたつ。また、北海道に来てから42年がたった。それまでは、千葉県をフィールドに調査をしていたが、そのときは、飛行機に乗せてやるからというおいしい話に乗ったところ、結局は飛行機でなく、連絡船にのって函館駅から特急北海に乗って早朝に倶知安に着いた。倶知安の駅から市街地は見え、旭ヶ丘公園のジャンプ台が見えた。「何て寂しいまちなんだろう」と勝手に思ってしまう、「ここには絶対住みたくない」と思った。札幌に降りたら、千葉とはまったく違う景色が広がっており「ここでやっていこう」と思えた。

- ・ 何年後かに倶知安に来た時、「絶対ここに住みたい」と思ったのは、目の前に富士山が見えたときだった。羊蹄山という認識はあったが、潰されたようなどんくさい「富士山」だと思っていた。また、尻別川沿いを調査で歩いた際に、高床式の住宅を見た。現在の羊蹄団地だと思うが、なぜ下に車庫がついているのだろうかと思った。私が住んでいた道職員の公宅は、石炭庫があるだけで、車庫がなかった。「何てすごい町なんだろう」と思い、倶知安に来ようと思った。しかし、役場にお世話になった際に、来る1週間前に職員住宅は空いていないと言われ、急遽、羊蹄団地に入った。目の前に憧れだった羊蹄山が見え、ちょっと目線をずらすとニセコ mountain が見え、下を見ると、届きそうな雪の山があった。
- ・ 子どもたちも、札幌で生まれて学校に行っていたが、倶知安に来て、毎日見ていたのが、川と山である。おおらかに育ったのではないかと思っている。そういうところに来てよかったと思っている。

○ かつての景観の評価を伝えることの必要性

- ・ 大人たちはまちの歴史や文化を伝えていかなければならない。「昔はよかった」という話は、思い出だけでなく、「こういうところが良いところで、今も残っている」、もしくは逆に、「こういうところが変わってきて、昔より良くなっている」ということを特に伝えなくてはいいけない。
- ・ その伝え方を、私は皆さんと一緒に計画づくりを通して進めて行きたいと考えている。労力と知恵が必要であり、どこかでは議論がしにくい微妙なところまで触れないといけなこともあると思うが、集まっている皆さんの多様な考えに耳を傾け、評価しながら進めなくてはいいけない。せつかく、色々な人と議論をしながら倶知安町の景観づくりのために「次に何をすべきか」ということを考えるところであるため、柔軟な発想を持って考えていきたい。

○ 歴史・自然は変えてはいけない

- ・ 別綴じの資料 P5 の「次の出来事に注目」という部分は、後で読んでおいてほしい。歴史が嫌いだという人は、何年に誰が何をしたということを覚えるのが嫌と聞くが、詳細な年次を我々は覚える必要はない。人物や背景を覚えれば良い。
- ・ 15 年から 20 年近く前になると思うが、30 万年、50 万年前の日本列島には人が住んでいたと分かる石器を見つけた人がいる。しかしその人は自分で埋めて「自分で発見した」と喜んでいただけであったが、それに影響を受けた子どもたちもいる。歴史を変えてはいけない。自然を変えてはいけない。“原人まんじゅう”や“原人道路”ができたり、世の研究者がこぞって日本列島はアジアの中で古いと言いつ放っていたことが、すべて架空のことだった。歴史を改ざんするようなことはいいけない。
- ・ しかし、想像することはできる。想像から色々なことに気づくこともある。そこから未来を変えるヒントが得られることもあり得る。あのときこうだったら、こうなっていたに違いない、と過去を振り返るということであるため、プラスに考えることができる。

歴史は覆ることはありません
でも…

「もしも、あの時、こうだったなら」と、想像することはできます
それから未来を変えるヒントが
得られるかもしれません



第1回倶知安町景観計画・緑の基本計画検討会議
2020. 7. 15 消防総合庁舎2階会議室

「モノ・ヒト・バ・・・自然と文化のタカラモノ」

矢吹 俊男

お話のはじめに

「・・・緑の栄枯・盛衰は、人間はもとより、あらゆる生物の存亡にかかわっています。一方、植物群落特に森林は、災害防止、水源の涵養、大気や水質の浄化、気候の緩和、森林動物の保護・繁殖の助長など、その公益性は、すこぶる多岐にわたっています。さらに、地球上随所に装飾された植物景観は、天然の織り成した最高の芸術作品として、四季の移ろいを通じ、常時鑑賞をほしいまにできますが、その季節、季節の感動は、日常生活に情緒的な潤いをもたらし、また、人生に生きがいを感じさせます・・・」(倶知安出身植物学者桑原義晴)

標題の語句について

「モノ(物)」 博物館資料のことです。

人文系資料＝文化のたからもの

自然系資料＝天然のたからもの

「ヒト(人)」 博物館の人、博物館を利用する人のことです。

＊博物館の人 学芸員、博物館を支え動かす人

＊利用する人 利用者(学校、社会人＝公衆・地域住民)

「バ(場)」 単なる場所を示すのではなく、単なる施設でもありません。

その施設(博物館という建物・空間)を活用し、活動する機関を構成する要素と考えます。

地域という「バ」で地域にいる「ヒト」と「モノ」を通して、体験を主体とするのにはちゃんとした意味があります。自然と人間のかかわりの長い歴史をきちんと辿ってみれば、いま、私たちがどんな時代に生きて、自然とどう付き合うべきかが見えてきます。この国土を、この地域を、自分で感じて、自分で考える、それがその人とそのマチ(社会)をもっと豊かにすると思うのですが・・・

過去に起きたことはすべて事実です。その事実を覆すことはできませんが、もしも・・・ということが許されるなら、いろいろな物語ができそうです。「もしも、200万年前にニセコ火山群が活動せず、現在に至ったらどうなっていたのでしょうか。「もしも、羊蹄山がなかったら・・・」「もしも、鉄道が日本海側に開通していたのなら・・・」

開拓はどうなっていたでしょう？

人々の暮らしはどうなっていたでしょう？

パウダースノー？

地域の「モノ、ヒト、バ」を考えてみましょう。

地域の「モノ」 地域の成り立ちを知るための資料(生活・産業にかかわる道具類、歴史＝考古・民俗、山岳関係、写真・図書・パンフレットなどの二次資料ほか)と正確な情報
郷土の芸能

地域の「ヒト」 その地域を訪れる人を受け入れる人

モノとバに詳しい人

地域の達人と呼ばれる人

地域の魅力的な人

ちょっと変わった人といわれている人

その地域を訪れる人(観光客、観客など)

観客とは不特定多数で、観客それぞれの教養、知識もまちまちです。

でも、観客の基本の心情(感動する、共感する)までは異なっていないと思います。

地域の「バ」 人と物をつなぐ場

景観、施設、歴史の舞台、歴史的建造物

モノもヒトもバも、地域にとってはとても有効な資源となります。この資源を埋もれたままにして
おいてもよろしいのでしょうか。

「しりべし」を考えてみましょう

「しりべし」だれが名付けたか後志と***後志＝しりべし、読めない・・・

「しりべし」ってどんなところなのでしょう？

「しりべし」にはなにがあるのでしょうか？

「しりべし」の魅力は何ですか？

「学び」を通していろいろなことに「気づき」、蓄えられた知識を知恵に変換し、この地を訪れる多くの人たちに自分の言葉で、「しりべしを伝えて」いただきたいと願っています。それは、「しりべし」というバに住む、ヒトの役割とっております。

ここで云う「ヒト」とは、内なるヒト(その土地に住む人たち、専門性を持った人たち)と外なるヒト(観光で訪れる人たち、途中立ち寄りでの人たち)のことです。

しりべし＝「海と山と田園と」

日本海の海岸線が、小樽市から余市町、積丹半島をめぐり岩内町にたどり着き、さらに南下すると蘭越町を經由して寿都町、島牧村へと続く。一方、海岸線に面していない仁木町、赤井川村、羊蹄山麓の各町村など1市13町6村、20の自治体で構成されているのが後志地方である。海と山と田園によって構成された「しりべし」は、北海道の産業、経済、歴史と文化が凝縮された圏域でもある。

豊かな自然と資源に恵まれた**特徴ある風土**を有したバ(広域的な空間)

それでは

風土とは何でしょうか

「風」 地域の慣習(ならわし、風習)、^{おもしろみ}趣(あじわい、おもしろみ)や様子、自然の景観や姿を意味しています。

「土」 世界、人のいるところ、そして地域を意味します。

「風土」とは、ある地域の自然や人びとの生活のあり方、さらには歴史全体をゆるやかに示しています。ですから、「**風土**」は**取りかえることができない**のです。

豊かな自然(モノそしてバ)

「海」小樽から余市そして積丹半島を巡り雷電海岸から島牧へと続く日本海の景観

「山」日本海と山あいの土地を隔てるように連なるニセコ連山と山あいのマチやムラのど真ん中に鎮座する羊蹄山を含む山麓の景観やカルデラの景観

「田園」仁木町から共和町に展開する果樹園地帯と水田、耕作地帯

豊かな資源(モノ) 幸＝景観、自然、食、歴史(歴史的景観含む)、文化、人

海の幸 山の幸 川の幸 季節の幸

「しりべし」は、極端な言い方が許されるならば、北海道島の成り立ちを知る手がかり(海岸線を形成する岩壁、ニセコ火山群、羊蹄山、積丹半島、カルデラの形成、黒松内低地帯等々)が随所に存在するところ(バ)であり、「海」「山」「田園」そして「商都」の景観(自然、歴史)を比較的至近な距離感で観ることができるところ(バ)であります。

羊蹄山麓地域

羊蹄山麓地域(以下「山麓地域」という)は、羊蹄山を囲むように倶知安町、ニセコ町、真狩村、留寿都村、喜茂別町、京極町の4町2村によって構成されており、日本海と山麓地域を隔てるように連なるセコ連峰までのエリアが含まれます。なお、本地域には尻別川流域として蘭越町も含めます。

冬、日本海の湿った温かな大気が上空でシベリアからの寒気に冷やされ、ニセコ連峰を越えるあたりで過度に冷やされ、羊蹄山麓に「これでもか」と雪を降らす。山麓地域が北海道内での多雪地といわれる所以です。

山麓地域の東麓から北麓を取り巻くように流れる尻別川は支笏湖の西側のフレ岳の西のその源を発し、上・中流域でヌップリカンベツ川、ペーペナイ川、真狩川、昆布川など主な支流を集め日本海に注ぐ北海道有数の長流です。

山麓地域の火山活動略史

本地域の人びとは、火山活動によって形成された大地で生活をしています。大地を覆った火山由来の堆積物は肥沃な土地に生まれ変わり、開拓以来農業が主産業となり地域の経済を支えてきました。羊蹄山から湧き出る水の1日の湧水量が2000 m³を超える場所は17か所あり、山麓地域の生活用水として人びとの生活を支え続けています。火山は羊蹄山麓地域

にとっては重要な要素となることから、その活動の概略を以下に述べます。

山麓地域と日本海をへだてる壁のように連なるニセコ連峰は、11 座の火山によって形成されています。これらをニセコ火山群と呼んでいます。その活動は約 200 万年前に西側の雷電山の噴火から始まり、東側の約 25 万年前のイワオヌプリの噴火まで続き、今見るニセコ連峰が形成されたといわれています。ニセコ火山群の最新の噴火はイワオヌプリの活動で、約 6000 年前の縄文時代前期ごろと推測されています。一方、羊蹄山は洞爺火砕流堆積物（*1）の台地上に形成された成層火山である。最近、山体の下に古羊蹄山が覆われていることが分かってきました。古羊蹄山の成り立ちは約 10 万年前－5 万年前で、約 4.5 万年前、西側が大きく崩壊し、岩屑なだれ堆積物として「流れ山」地形が形づくられ、倶知安町からニセコ町、真狩村に広く分布しています。古羊蹄山形成から山体崩壊の時期、本地域では、人間の生活の痕跡は見つかっていません。新羊蹄山は約 4.5 万年前－1 万年前の間に形成された。新羊蹄山が形成され、山頂の一部や山体の一部で噴火活動が起こった時期、山麓地域では人間が生活を営み始めた時期でもあります。羊蹄山の最も新しい噴火は約 2500 年前とされ縄文時代晩期ごろです。

*1 洞爺火砕流堆積物

洞爺カルデラは、約 11 万年前の破局的噴火によって形成された直径約 10 km のほぼ円形に近いカルデラ湖である。この洞爺カルデラ形成に伴い噴出した大規模な火砕流が洞爺火砕流堆積物である。その量は 150 km³と見積もられ、南は太平洋へ流入し、北西方面ではニセコ火山群の麓を分岐するように日本海へ達した。

北から南に長い日本列島、北緯 45 度をこえている北海道の北端稚内から、列島の最南端の、沖縄県西表島、石垣島は北緯 25 度よりも南にはみ出しています（北緯 23 度 26 分から北緯 50 度までの間に日本列島はすっぽりと収まっている）。何と 25 度以上もの緯度の幅をもっているんです。四方を海囲まれた南北に細長い日本列島だから、その自然景観や気候を多彩で多様なものにしています。日本の国土の 3 分の 2 が山地です。宗谷岬から与那国島まで 3 千キロもあります。その長さに比して、列島の最大幅は 2 百キロほど、ですから全国のどこからでも山が見えるということになっています。

地球の成り立ちのなかでも、日本列島の成り立ちはとても劇的です。大地の生い立ちとその後の姿を学ぶことができるフィールド日本列島、北海道島、そして「しりべし」。まさに大地の公園です。

次の出来事に注目

日本列島

4300 万年前: 中央太平洋の海山列が方向を変えた(北→北西)。

日本列島太平洋の底から見上げると、1万メートルの大山脈太平洋プレートが
アジア大陸の下にもぐり込むようになる。

2200 万年前: アジア大陸の縁で火山噴火が起こり、日本海が開き始める。

2000 万年前: 湖ができながら、

1600 万年前: 日本海が太平洋とつながる

「しりべし」

200 万年前: ニセコ火山群の噴火活動開始(西→東へ)

7～10 万年前: 洞爺火山の噴火、巨大な噴煙柱が一気に崩壊し火砕流が噴火湾
と日本海に流れ込む

日本海への流れ込みはニセコ火山群に阻まれ、火山群の北と南の隙間
から火山灰が流入。

4～6万年前: 古い羊蹄山が誕生

3 万年前: 人間が住み始める

1.8 万年前: 「しりべし」後期旧石器時代の遺跡が増える

羊蹄山がほぼ今見る姿に

なぜ過去から学ぶことが大切なのでしょう

過去を振り返ることはとても大切なことです。なぜなら、過去を知ることが、今の生活がどう
いう過程を踏まえて成り立ってきたのかを知ることにつながるからです。そして、どのような未来
にしていくなかを考えるきっかけにもなるからです。

ということになります。

過去からの情報を今に伝え、未来に生かす手立てを提供する

つまり、古いモノを大切にし、今に生かす。変わらずに残されてきたモノ、バを、過去の失敗
などから学び変わらぬ価値として未来に引き継ぐ。過去にあったコト、モノを正しく検証し、新し
いモノ、コトを取り入れながら創っていく。**伝統と新興のバランス**です。

観光とは何でしょう

その土地の光を観光に訪れることと考えます。

その土地の光とは

景観、自然環境、歴史、伝統文化、祭り、人物、食・・・などの地域の資源です。

まさに、「見る、食べる、学ぶ」と、「楽しむ」ことです。